



明日に向かって 伝える 続ける

パルシステム

放射能レポート

pal*system

2025年8月4回

次回は2月企画予定です



核のない世界へ 今、私にできること

今年は戦後80年となる節目の年。
戦争を知る世代が年々減っていくなかで、
被爆直後の日本を知らない世代に
どうやって核の脅威を語り継ぐのか。
今回は大学生活を送りながら
「語り部」をめざす女性に話を聞きました。

取材した人 浜岡 希実さん

神奈川県出身。高校時代は「高校生平和大使・高校生一人署名活動実行委員」としてさまざまな活動に参加。今春から大学へ進学し、環境学を学んでいる。

「ビリョクだけどもリョクじゃない」
私の行動が人の心を動かし

「『未来の子どもに平和な世界を託したいから』パルシステムで平和活動に取り組んでいた母の影響を受けた私。平和を願う気持ちはみんな同じと思っていました。でも、そうとも限らない、思ったのは高校3年生のときです」

浜岡希実さんは高校2年のときから「ビリョクだけどもリョクじゃない」をスローガンに掲げる学生団体「高校生平和大使・高校生一人署名活動実行委員会」の一員として、国連へ向けた核廃絶の街頭署名活動を続けていました。「世界で唯一の被爆国日本、そこに生まれた使命感みたいなものがありました」と浜岡さん。しかし、街頭に立つと好意的に協力してくれる人だけでなく、心ないことを言う人もいたそうです。

「お前らおとなに利用されているだけなんだよ」「たかだか高校生がやったことで何が変わるもんか」「核軍縮なんて無謀だろう」。自分がやっていることはちっぽけで、何も変えることができないんじゃないだろうか。そんな不安が心をよぎりました。

その一方で、自分の取り組みを知った同級生が「署名は名前や住所が出ちゃうからできないけど、じつは興味があるんだ」と話してくれたことも。「それを聞いたときは本当にうれしくて、自分のやっていることは決して無駄じゃないんだって。平和活動ってなかなか人に言えないけど、心のどこかで気になっている人たちはいる。自分が声を上げること、そんな人たちが何か行動するきっかけになれるかもしれない」

それ以降、もっと何かできないだろうか、自分のなかで模索する日々が始まりました。

被爆地出身ではない被爆三世でもない
私だからできることがある

浜岡さんが語り部をめざす転機となったのは、自分に戦争のことを教えてくれた曾祖母の死。「曾祖母との死別で、戦時中のことを知る被爆体験の語り部が少なくなっていることが、すごく身近に思えました。被爆体験の継承をしたいと思ったのは、戦争体験のなかで次の世代にいちばん伝えるべきことが核問題だと確信しているから」

しかし、広島・長崎にルーツのない自分の声に耳を傾けてくれる人はいいるのだろうか。そのとき思い出したのが自身も所属していた「KNOW NUKES TOKYO」設立時の願い、「被爆地以外の土地」で核問題を考える空間をつくりたいというメッセージでした。これは長崎出身で、被爆三世でもある元代表が、東京を拠点に活動を始めた理由でもあります。

「私は『被爆地出身ではない』『被爆三世でもない』ことを逆に強みにしよう。戦争を実際に体験していない私が疑問に思ったことや共感できたことが、次の世代に語り伝えるヒントになるはず。そう考えることにしました」

被爆者の体験や想いを語り継ぐのはもちろん、その話を自分ごととして捉えてもらうには、聞き手側の生活との接点が重要です、と浜岡さん。戦争や原発事故を経験していない世代にとって身近な社会問題「環境」と結びつけることが理解につながると考えました。

「環境学も幅広いですけど、身近なところだとエネルギー問題ですね。日本では核の平和的利用と前向きな言葉で研究が続けられてきましたが、核がもつ潜在的な危険性は今も昔も変わりません。どれだけ安全に管理したとしても、人の想像を超えた問題がいずれ起きる。そのため



写真上) 曾祖母との1枚。浜岡さんに戦時中のことを教えてくれたもっとも身近な存在でした。
写真下) 高校時代に行った平和ボランティアの活動発表。そのスライドの一場面。

には、原子力に依存しない世界にしたいくしありません。被爆者の想いを受け取り、次の世代へつなぐ。そして、核のない世界をめざす。これが、今、日本で生きる私にできることです」

